

——あの頃のこととは、この辺でとゞめやう。忘れてゐる事も多からうし、書けばまたきりが無い。この後は、もう浜町時代になる。こゝまで書いて来てあれこれ思ひ廻らすと「浜町回顧」でもして急に書きたい気もする。その浜町の、角に柳がそよいだ家も、今は当時を知つたもの、みの記憶に残るだけになつてしまつた。今日あたり、あの浜町一丁目日本橋倶楽部前と両国行の電車の車掌が呼んだ停留場を下りて曲つたあの辺一帯、焦土に白々とバラックの家が冬ざれて建つたらう。場所柄だけに、踏んで見なくても惨ましい。今は、ほんとに「回顧」のみが残されたのだ、何時かまた折を見て「浜町回顧」を是非書いて置かう。——もはや返らぬ青春のあの二、三年の自分のためにも。

(大正12年12月8日 曲水913・4)

浜町雑記

大正五年秋、丹後町から浜町の本宅へ先生が越されると、やうやく私達の間に来るか、つた俳句の中心は、急に、山の手から下町に移されてしまつたわけだつた。それだけ、山の手に住む私達には淋しかった。

一度浜町へもといふ先生の言葉で、苔雨君に誘はれて或る晩二人で浜町へ伺つた。勿論浜町のお宅へは初めてだつた。途々

想像して行つた浜町二丁目十一番地の流觴居は、電車を下りた処から遠くはなかつた。東京に住む者には、浜町と聞けば或る概念を持つ。流觴居は、やはりさうした浜町に在る住居らしかつた。

「此処ですね」

私達は、余て先生から伺つてゐた通りの柳が角に枝垂れた家の夜の二階を見上げて頷きあつた。

格子を開けて案内を乞ふと、ひっそりした中から人影が動いて来て、灯影の障子が中からあくど、私達の前に坐つたのは黒縮緬の羽織を着た女の人だつた。その銀杏返しの向ふ側から、二枚折の前に置いた雪洞風の燭台の灯が宵らしくさしてゐた。

折悪しく二三日来不快で臥せて……といふ事だつた。その人はしとやかな物腰でさう言つた。残念だつたけれども仕方がなかつた。私達はまた柳の木を見上げながらも静かな横町を電車路の方へ歩いて行つた。が、今の灯影に見た人がどういふ人だらうといふや、好奇心に近い疑問を、さういふ折初めての訪問者が抱くやうに、やはり私達も抱いた——。その姿があまり意外だつた。あまりしとやかだつた。そして総てがあまり下町風にあてはまつてゐた——。が、結局二人共に解らなかつた。その後、同じ家で先生に逢ふ日まで、時々私はこの晩の疑問を独り繰返してみた。そして、僅かに玄関を覗き見たにすぎなかつたが、それに依つて改めて想像してみた先生の生活と、二十一歳の自分の生活を較べて、其処に大きな隔りのあるらしい事を考へてみると、漸く丹後町で親しみかけた先生が、浜町